ぼくのスピカ

天音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぼくのスピカ

【Ｎコード】
Ｎ０７４７Ｘ

【作者名】
天音

【あらすじ】
彼女は多分、
僕に使わされた天からの「厄災」なのだろう。

No. 1

大人になって過去を振り返れば。
今、俺が悩んでいることなんてほんのちっぽけなことで。
後になって考えてみれば。
なんであんなことに頭を悩ませていたのかと腹を抱えて笑ってしまうのかもしれない。

だとしたら早く俺は大人になりたいし、
このまま気絶した振りをし続けれいれば、目を開けずにいれば、
あっという間に時間が経過し、現在を過去に出来るのならば
俺は喜んでこのまま無視を決めこんでいることにするぜ。

本当にそんなことで現実逃避が成立するならな。

No．２―１

時を遡ること2時間前。
俺は都内のホテルでレセプションに参加していた。

一流企業の社長や芸能界のドンなど、メディアを賑わす華やかな人々が一同に会し、
テーブルに並んだお高い料理の数々にさして手も付けないまま、
腹黒い算段の元におしゃべりに興じるある種の神経衰弱会場のことを意味するそれに、
今朝になって参加するよう親から命じられた俺は言われるがままに顔を出し、
それなりの役目を果たして自宅のマンションに帰ってきたのがつい先ほどのこと。

２４時間対応のコンシェルジュがある都内でも有数のラグジュアリーマンションの最上階で、セコム完備オートロックと強化ガラスのコンボとくれば、そりゃあ誰だって外から不審者が侵入出来るとは思わないだろう。
いや、少なくとも俺は思ってなかったよ。
今のさっきまでは。

玄関で革靴を脱ぎ捨て、長い廊下を歩いた末ようやくリビングのソファに腰を下ろすや否や。

けたたましいガラスの破裂音が生じたかと思いきや、俺の顔面めがけて突如『何か』が吹っ飛んできた。

それは「あ」と声を上げる間もない。

にも関わらずどうにか腕で顔を覆う事に成功した事を誰か盛大に褒めてほしい。だが受身を取りきれなかった無様さは寛大に見逃して欲しい。
重量のある『何か』に押し出される形で俺は背中からフローリングに強打し、息が詰まると同時に視界が暗転。

そして今に至る。

「もし、もし……」
か細い女の声に呼び覚まされ、徐々に俺の意識が覚醒していく。
母親の声ではないし、俺に女姉妹はいない。そもそもこの家には俺以外の人間が存在しないわけで、つまり全く知らない赤の他人の声という事になる。
なんなんだ、さっきの出来事はこいつが絡んでいるのか？
だとしたらここで目を覚ましたりしたら逆に危ないんじゃないのか？
意識を失う前に見た光景はどうやら夢ではないらしく、窓ガラスが割れているのか、少し湿気っぽい９月の風が部屋中に吹きすさび、けたたましいセコムサイレンが部屋中にこだましてこの部屋の異常をマンションの住人たちに訴え続けている。
地上５６階建ての最上階。ぶつかってきそうなものは鳥か飛行機か……これは冗談にならないにしても、俺が生きてるというだけでまず後者はないだろう。かといってただの鳥では防弾ガラスなど割れるはずもなく、ましてや人間が一緒に降ってくるわけがない。まさか大都会のど真ん中でハングライダーやスカイダイビングでもしていて間違えて俺の部屋に激突したとかそういうわけなのか。どう考えてもガラスは突き破れないだろう。
「もしもし、大丈夫ですか？　―――困ったな、どうしよう」
本当に困ってるのかとツッコミたくなるような冷静な口調でそう

言い、俺の首筋に女の冷たい手のひらがあてがわれる。数秒の沈黙の後、そのままの体勢で女は俺に向かって話しかけてきた。
「なんだ、目を覚ましてるじゃないですか。脈でバレバレですよ。いい加減起きてください」
まるで「かくれんぼは終わったのよ」と呼びにきた友達の気軽さでそんなことを言われると、俺としても嫌々ながらも瞼を開かずにはいられないわけで。
「なんなんだ、あんた一体……」
恐る恐るなんてものじゃない。
半ば恐怖におびえながら少しずつ目を開けると、そこには予想よりもずっと近くに女が座っていた。
だが予想が当たったのはそれだけである。
窓ガラスが吹き飛ぶほどの衝撃で室内の照明系統はとっくに廃品になっており、その女を浮かび上がらせていたのは外から差し込む満月の明かりのみだが。
そんなおぼろげなものでもはっきりと分かるほど。
思わず息を呑むとはこういうことかと思わせるほど。
美しい顔をした少女が、俺の顔を覗き込んでいる。
———見たこともないような、金色に光る瞳を輝かせて。

No. 2－2

「なんだ、その目。カラコン？」
次第に目が慣れてきて、この薄暗い中でも相手の容姿が仔細に観察できるようになった。
銀色の長い髪に金色の瞳。服装はいささかトリッキーで、見た感じを統一すると渋谷や原宿を闊歩していそうな感じの女だ。そのミニスカートと細い足で一体全体どうやって窓を蹴り散らし入ってきたというんだ……。
女は俺の視線から遮るように瞳の上に両手をかぶせる。
「気持ち悪い？」
「いや、別に色なんて何だっていい。むしろお前の存在自体が気持ち悪い。一体なんだお前、どうやって入ってきたんだ。泥棒か？」
ようやく頭が冷静になってきた。
壊された窓。入ってきた不審者。俺は今とても危ない状況に陥っている。
気付かれないように後ろに後進しながら、何か武器になるようなものは無いか手のひらで床をまさぐる俺に女が質問を投げかける。
「自己紹介を求めてるの？」
「そういえば聞こえがいいがな」
「名前？　それとも職業を聞いてるの？」
職業はあとでやってくるおまわりさんにでも聞かせてやってくれ。
「じゃあ名前ですね。困ったわ、いきなり困ってしまった」
そうとは見えない無表情で女は悩んでいると言わんばかりのポーズをとる。腕を組んで「うんうん」唸る姿が可愛くないかと言われれば正直見るに値するものではあるが、相手は折り紙付きの不審者である。
すると女はぱっと顔を上げて。
「あなたは何て呼びたいですか？」

「は？」
「私のことを何て呼びたいですかって聞いたんです。もしかして今の言い回しは分かりづらかったですか？」
そうじゃねえよ。お前の返事が答えにかなってなかったんだよ。
「あれ、もしかして私の話聞いてませんでした？　それとも聞こえなかったのかしら」
無言の俺を余所に、女は一人で勝手に話し続けている。
なんだ、もしかして本物のヤバい子なのか？
鳴り響くセコム音に向かって、「これが障害になっているんですね」などと呟きながら、何のつもりか女は宙に向かって片手を払った。
すると、どういうことか。
あれだけ危険を訴え続けていたサイレン音が泣き止んだ。
女が手を払うと同時にである。
「これで私の声がちゃんと聞こえるようになりましたね」
穏やかな言い回しだが、そこには柔らかさもなければはんなりなど一切含まれていない。無機質に近い単調とした声音が先ほどよりも一層職質じみた音色を強くして聞こえるのは俺だけか。
「今、サイレン消えたよな？」
「消えました。うるさかったものですから。もしかしてサイレンの音を聞いていたかったんですか？」
相手は「あら物珍しい」といった風情である。俺にそんな趣味はない。
「それならもう一度つけましょうか？」
「つけれるの？」
「お好みならば」
もう一度、女は先ほどしてみせたように宙に向かって片手を振るった。
躾の鳴っていないポメラニアンのように再び鳴り叫ぶサイレン音が俺の鼓膜に嫌でも訴えてくる。

こいつが……この目の前にいる女こそが、この耳障りの元凶を再び作り出したのだという事を。
「何なんだ、お前。魔法使いか？」
冗談で言ったつもりだった。
こんなこと本気で言うやついるものか。
吹きすさぶ風に銀色の長い髪をなびかせながら、女……と呼ぶにはまだ幼い、少女が満月色の瞳を半月に細める。
「よく分かりましたね。そうなんです、私、魔法使いなんですよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0747x/

ぼくのスピカ

2011年10月4日03時25分発行